

数河獅子の ルーツを求めて 奥飛騨に行く



イ・ウンス●1954年生まれ。韓国外国語大学卒業後、東京大学大学院で学ぶ。韓国でTVの「日本語講座」を5年間担当するかたわら韓日演劇交流に努め、BeSeTo演劇祭韓国委員、韓日演劇交流協議会副会長、韓国日本語文化学会会長を歴任。韓国比較文学学会会長

奥飛騨に高麗獅子とも呼ばれる
伝統芸能があった

去る夏のことである。西宮の大手前大学でサバティカルを送っているとこゝろに、一通の手紙が舞いこんだ。第11回桑原武夫学芸賞の招待状である。受賞者は四方田大彦氏。四方田さんとは30年来の友人であるだけに、うれしい。さっそく出席の返事を出す。そして、その日は、はしご酒で先斗町にまでなだれ込み、終電も気にせず、飲みに飲んだ。

その席でのことである。四方田さんに、長野の別荘にと誘われた。隣で、奥さんの千恵さんともあいづちを打つ。



数河獅子保存会の山村悟史氏と数河獅子の奉納先である松尾白山神社を訪ねた
提供：筆者（以下同じ）

そして、念を押すかのように、向こうから稲賀繁美さんがフラッシュを焚く。私は、即座に受諾した。それは、過去にも、彼の三浦海岸の別荘や月島の書齋で楽しく夏を過ごした経験があるからであり、そのうえ、帰りには、飛騨の獅子舞を調べることができると思っていたからである。

2008年夏の、私のワールドワーカーの旅は、このようにして始まった。送られてきた2枚の葉書の地図を頼りに、娘2人を乗せた車を走らせ、八ヶ岳自然郷の彼の別荘に直行した。そして、着いてからは、悠々と過ごした。昼は、温泉に浸るかたわら、名もなき池のまわりを散策し、名も知らぬ小鳥

に餌をやる。また夜は、四方田さん手作りのペキン・ダックにワインを傾ける有様であった。

心身の充電を終え、3日目の朝は、飛騨に向かった。奥飛騨の数河獅子のことを調べるためである。なぜ数河獅子なのか。実は、私は前年の秋、飛騨神岡で開かれた「第10回全国獅子舞フェスティバル」に韓国代表団の団長として参加していたが、そこで、高橋裕一獅子博物館館長の発表を拝聴する機会に恵まれ、数河獅子が高麗獅子とも呼ばれているという事実を知ったからである。

数河獅子のはじまりには
新羅の渡来人が関わったらしい

詳しく言うと、数河獅子舞のチラシには、「大宝年間（700年頃）、新羅の僧隆観がこの地に住んでいた時、シシが面白く狂っている様を見て、高麗の芸術を獅子舞にして後世に残したものの」であると書いてある。そして、『続日本紀』によれば、隆観は幸甚の子である。また『日本書紀』には、幸甚は行心で、大津皇子の謀反に関わり、飛騨に流された新羅の沙門であると記されている。



白山神社に奉納される数河獅子舞。毎年9月の秋祭りのときに、豊穡への感謝をこめて奉納される。太鼓や笛に合わせ舞い踊り、アクロバティックな曲芸の要素も盛り込まれている

要するに、隆観は新羅からの渡来人の息子であった。それは、彼が飛驒の神馬を朝廷に献上し、その功で赦免されて還俗したあと、金財を名乗っていたことからわかる。さらに、徳川家所蔵の『大日本史』に「金氏蓋（新羅の）王族也」と明記されており、『新

撰姓氏録』には、「金氏より別れて国看連となるものあり」と出ていることから、のちに国看連になった隆観（金財＝金宅良）は、新羅の王族出身であったことが、推察される。

しかも、彼の神馬献上によって、「ひだ」の漢字表記が「飛驒」に定まったようである。こうなると、日ごろ韓日比較演劇学を標榜している私には、おのずから興味が湧いてくる。現地に行くと、なんらかの形で隆観の足跡が残っているかもしれない。そして、もつと数河獅子のルーツが辿れるかもしれない。とにもかくにも、もう一度、現地に行ってみよう。その思いが、私をして、2人の娘まで連れて、奥飛驒の数河高原に向かわせる原動力となった。

1300年前の伝説が残る 奥飛驒の文化財を訪ねる

四方田さんの別荘を発つてから、途中で松本城と上高地を遊覧したあと、高山に入り、町はずれの安い旅館に、いわばベースキャンプを張った。そして、また3日間、高山の獅子会館、古川、国府、数河高原に通い、数河獅子のことを調べた。調べにあたっては、数河獅子保存会の山村悟史会長にお世

話になった。彼は、数河獅子舞の奉納先である白山神社、松尾白山神社をはじめ、隆観の屋敷跡、馬頭観音を祭る慈眼寺、行心が滞在したとされる寿楽寺など、縁の地を案内してくれた。

なかでも、私は隆観が獅子を見たといわれる夫婦岩に関心があつた。地名大辞典の古川数河の欄に「夫婦岩」という小字が載っていることを話すと、彼はさっそく母に電話で確かめ、そこに連れて行ってくれた。しかし、そこは小川の流れる小さな谷間にすぎなかつた。伊勢市二見町の夫婦岩のような岩場は見えなかつた。

当然であろう。1300年も前のことである。そして、伝説上の話でもある。遺跡が残っているほうが、むしろおもしろいかもしれない。私は、この奥飛驒の数河高原の空気を吸っただけでもない。そう思った。そして、火の種を保つために、口で空気を吹きこんでいた原始人と同じく、この冬は、この奥飛驒で吸った空気を吹きこんで「数河獅子＝高麗獅子」という種を暖め、芽生えさせ、花を咲かせてみようと思った。フィールドワークのお陰で涼しい夏を過ごしたが、冬もまた、暖かくなりそうだ。